

英語科 対面学習指導 実践報告

1. 学年と単元・題材 3年 特設授業「英英辞典を使ってみよう」

2. 教材について

本時は、この3月に卒業した中学3年生を対象に行った、英英辞典の活用法についての一連の特設授業のうち、対面ならではの効果が得られたと感じた回の実践報告である。対面グループワークで相手の手元をのぞき込みながら学習を深めていく過程は、教師と生徒の一対一のオンデマンド授業や、（本校では現在のところ行われていない）同時双方向オンライン授業では効果が得られにくいと考えている。

3. 本単元の目標／評価規準

(1) 本単元・本時の目標

この一連の授業の目的は、生徒たちが自分の辞書の使い方を改めて見直すこと、英和辞典や和英辞典との違いや日本語の国語辞典との類似性を理解すること、英語の品詞の概念を再認識すること、分子や関係詞を使った後置修飾の表現に慣れること、英英辞典の辞書機能以外の活用法を知り、卒業後の自律的な英語学習に役立てる契機を得ることであるが、本実践では英語の品詞の概念を再認識することと、後置修飾の表現になれること2つの部分に焦点を当てる。

(2) 本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
辞書をすばやく使える。また、英英辞典の記述をなるべく速く読み取り意味を理解する。	各品詞に特徴的な表現に触れたり、後置修飾の例文に多く触れたりすることで、英文の構造や品詞の概念に深く迫る。	興味を持って楽しみながら英英辞典をしようとしている。

4. 生徒の学習の実際

(1) 品詞の概念を整理する回の場合

10個の英語の説明を読んで名詞・動詞・形容詞に分類するクイズを行った。語頭文字を頼りについでに単語を当ててもよいが、ここでの中心課題は、単語の説明の仕方に着目した品詞分類であるため、単語を当てるのは二の次にして、名詞・動詞・形容詞の区別をつけるためのヒントがどこにあるのかを考えてもらった。動詞の特徴は不定詞 to (do) で表されていること、名詞の特徴は先頭部分に（しばしば冠詞を含んだ）名詞があること、形容詞の特徴は～ing などの分詞で表されていること、などに気づいてもらう授業となった。



(2) 後置修飾の回の場合

後置修飾の中でも特に関係詞に着目した。関係詞を使った文は日本語話者にとって習得が難しいものの1つである。英語圏からの帰国生たちが、とりわけ目的格の関係詞が省略されている文を難なく書いたり話したりしているのを見て憧れ、自由英作文などでも意識的に使おうと努力した結果、自然に使えるようになる生徒も多い。肝心なことは、関係詞を使った文を大量に聞いたり読んだり、話したり書いたりすることなのである。その練習量を積むためにも英英辞典は有効だと考えた。

英英辞典では、関係代名詞と同じくらい頻繁に関係副詞に出くわす。1～2月時点の中3生にとっては、関係代名詞は既習事項であるため、英英辞典の説明が格好の復習材料だと考えたが、所有格の関係代名詞 **whose** や関係副詞は、現段階では中学校の学習指導要領外なので未習である。しかし、文法として習う以前に、豊富な例文に触れる方が使い方の感覚をつかみやすいのではないかと考え、それらも取り混ぜた課題を作った。



5. 生徒の学習効果と展望

(1) 授業の目標に対する効果と展望

英語の品詞の概念を再認識することについては、生徒の授業中の様子からは、少なくとも使用頻度の高い品詞（動詞、名詞、形容詞など）については既習単語と品詞の関連づけが既に出来ている状態で授業に臨んでいたようだったが、それをさらに英英辞典の英語による説明に触れることで、品詞の概念の整理が少し進んだようである。例えば名詞の説明は、不定冠詞 **a** を伴った名詞や **something, somebody** といった代名詞で始まっていたり、動詞の説明は不定詞 **to (do)** で始まっていたり、形容詞の説明には現在分詞～**ing** や過去分詞～**ed** が多く使われていたりなどである。

一方、分詞や関係詞を使った後置修飾に慣れることについては、意味を知りたい、あるいは、英語でどう説明しているのか知りたいという好奇心に引きずられながら、多くの文例に触れることができたようである。文法の練習問題よりはずっと面白く、読み物教材よりははるかに効率良くそういった表現に出会えるという意味では、英英辞典は効果的な学習材と言える。

また、生徒たちのアンケートの自由記述を読む限りでは、本実践は、中学校3年間の学習の振り返りとしても高校での英語学習の橋渡しとしても、良い契機となったようである。

(2) 対面授業ならではの効果について

この一連の授業は新型コロナウイルス感染症で休校措置になる直前（1～2月）に行った。その後生徒たちは期末試験と卒業式だけ登校して卒業していった。新年度になってからは、4月には送付教材を使って、5月にはオンデマンド型のオンライン授業を通じて、新3年生に在宅授業を行った。

本実践は、1対1のオンデマンド授業でも出来なくはないだろうが、もっぱら「知識・理解」のみで成果が上がる授業になってしまうと想像する。様々な気づきや思考の深まりは、学び合いの中でこそ生まれるものだが、生徒相互のレスポンスを瞬時にその場で共有できないオンデマンド型の授業では、その効果はきわめて低い。また、同時双方向型の授業なら、この授業の良さがどの程度活きるかと想像してみたが、互いの顔を見ながら意見の同時共有はできても、手元の辞書をお互いにのぞき込んだり見せ合ったりしながら学ぶことが出来ない。

以上のように考えると、この授業で得られる効果は対面授業ならではのものであり、オンライン授業向きではないと改めて感じた。